

平成21年6月15日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18720119
 研究課題名（和文） 日本語諸方言における確認要求表現の記述的研究
 研究課題名（英文） Descriptive Approach to the Confirmative Questions in Japanese dialects
 研究代表者
 松丸 真大（MATSUMARU MICHIO）
 滋賀大学・教育学部・講師
 研究者番号：30379218

研究成果の概要：本研究は日本語の各地方言において確認要求表現を記述することを目的とした。この目的を達成するために、(1) 全国諸方言の素描、(2) 要地方言の詳細な記述、という2つのアプローチで研究をおこなった。(1) では日本語諸方言（主に西日本）の確認要求表現形式を把握するために、既存の資料を用いた分析、および大学生に対するアンケート調査をおこない、(2) では関西・奄美大島・白峰・富山方言の記述を行なった。その結果、これまで記述がほとんど無かった確認要求表現の形式的・意味的バリエーションが明らかにできた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,400,000	0	1,400,000
2007年度	1,100,000	0	1,100,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	210,000	3,410,000

研究分野：日本語学、方言学、社会言語学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：日本語学、方言学、モダリティ、文末詞、確認要求表現、否定疑問、推量

1. 研究開始当初の背景

確認要求表現とは、次の例のように標準語の「ではないか」「だろう」「よね」によって表される表現のことであり、話し手の認識を提示しながら聞き手の反応を要求するという、平叙文と疑問文の意味的特徴を併せ持つ表現である。

- (1) お前、少し太ったんじゃないか？
 - (2) 何をする、危ないじゃないか！
 - (3) お母さん、遊びに行ってもいいでしょ？
 - (4) あそこのお店、なかなかおいしいよね？
- 標準語では(1)(2)の用法はそれぞれ「の

ではないか」「ではないか」という否定疑問を出自とする形式によって表されるが、(3)は推量形式「だろう」、(4)は文末詞「よね」という別個の形式によって表される。

日本語諸方言に目を向けると、確認要求表現に関わる形式は（他の文末詞の意味が方言間で対応しないのとは異なり）ほとんどの方言で用いられているという点で特徴的である。ただし、諸方言においては、(1)と(2)は全く別の形式によって表されることがほとんどである。また、東北方言では(2)と(3)を一つの形式（ベシタ）で表し、中部・

山陰地方の方言では(2)と(4)を一つの形式(ガネ)で表したりすることがある。さらに、京阪方言や青森県弘前市方言では(2)の意味を表す形式が2種類(ヤンカとガナ、バとツキヤ)存在する。

このように、日本語諸方言の確認要求表現からは、次のような特徴を見出すことができる。

(i) 標準語では同じ形式で表す意味のある方言では別の形式で表す

(ii) 標準語では別の形式で表す意味のある方言では1つの形式で表す

(iii) ある用法に2つの形式が用いられる

つまり、日本語の確認要求表現を考察するにあたっては、現代標準語だけを見ていたのでは不十分であり、日本語諸方言に目を向ける必要があるのである。そして、諸方言の多様性を考慮し、方言個別的な現象と方言間で共通する現象とを整理する必要がある。これが本研究の目標である。

本研究には上述のような意義を見出せるが、方言の分野ではまだ研究が始まったばかりである。特に確認要求表現というモダリティに関わる形式の方言対照研究はこれまでほとんど行われていない。松丸(2004)「青森県弘前市方言の確認要求表現」や松丸(2005)「島根県松江方言のガ系文末詞」は、統一的な枠組みによって諸方言の確認要求表現を記述しようとしたものである。

視野を広げて文法的な観点から考えると、確認要求表現は疑問文と平叙文の特徴を併せ持つ表現であるといえる。日本語は、この表現を否定疑問形式・推量形式・文末詞によって細かく表し分けるという点で、平叙文と疑問文の連続性の問題に取り組む絶好のフィールドである。

2. 研究の目的

以上のような目標を達成するためには、次の作業を行う必要がある。

(a) **要地方言の確認要求表現の記述**：これまでにも各地の方言で文末詞の記述は行われてきた。しかし、詳しい文法記述を行ったものは少なく、またそれぞれが独自の枠組みによって行われている、という問題がある。(c)の対照研究のためには、ある程度統一された枠組みによって諸方言を記述する必要がある。

(b) **要地方言の談話資料の活用**：文法記述調査は仮説検証型の研究スタイルをとることになるが、母方言以外の記述を行う場合には仮説を立てにくい場合がある。そこで、談話資料からの用例採集を通して問題発見型の研究も行う必要がある。この際、公刊されている既存の談話資料を用いて行うことも可能であるが、記述を行った地点・話者の談話資料

を用いることが理想的である。

(c) 統一的な枠組みによる方言間の対照

(a)で行った記述をもとに、日本語諸方言の確認要求表現に関わる形式にはどのような意味・用法があるのか、ある意味・用法はどのような形式によって表されるのか、意味・用法と形式の対応関係のうち方言間で共通するものがあるのか、という問題について整理する。

(d) **日本語諸方言の類型化**：(c)で行った方言個別的・方言普遍的な現象の整理をもとに、確認要求表現をいくつかのタイプに分類することができる。これは、日本語諸方言を類型化することにつながる。

本研究課題では、日本語諸方言における確認要求表現の類型化を行うための基礎的研究として、上の(a)～(b)の作業を行う。

(a)記述調査と(b)談話資料の活用を通して、要地方言の確認要求表現の体系を明らかにすることを目指す。

3. 研究の方法

本研究では、次の2つの方法で、日本語諸方言の確認要求表現にアプローチする。

(1) 全国の確認要求表現形式を収集する

上述のように、方言における確認要求表現の記述はほとんど無いのが現状である。そこで、次の2点を明らかにするために、①と②の二つの方法によって分析をおこなった。

(a) 諸方言でどのような形式が用いられているのか

(b) 諸方言の確認要求表現形式はどのように使い分けられているか

①既存の資料を用いる

既存の資料とは、各地の談話資料や公開されている調査結果を指す。これらの資料の中で、国立国語研究所で公開されている『方言文法全国地図』(以下、GAJと呼ぶ)の調査結果は、同じ基準で集められた全国807地点のデータであり、各地の方言を比較する上で貴重な資料である。本課題では、公開されているデータの中で確認要求表現に関係するデータを抜き出して考察をおこなう。

②新たに調査を実施する

GAJによる分析では、全国でどのような形式が用いられているか、という点を知ることができるが、それらの形式がどのような意味で用いられているのか、という点については知ることができない。そこで、大学生に対して確認要求表現のアンケート調査を実施することにした。大学生に対して行うのは、GAJからの変化も併せて考察できるためである。アンケートの質問は、(2)③で述べる分析枠

に沿って作成した。

(2) 要地方言の確認要求表現を記述する

(1) のアプローチによって、日本語諸方言の確認要求表現形式と、その大まかな用法は明らかになる。しかし、質問数が限られたアンケート調査では、各地方言の確認要求表現形式が持つ微妙なニュアンスの違いを知ることができない。そこで、要地方言の記述をおこなうことにした。記述の詳細は以下の通りである。

①調査対象地域

関西地方、琉球地方（鹿児島県奄美大島）、北陸地方（石川県白峰方言、および富山県）（当初は、山陰地方、東北地方でも調査をおこなう予定であったが、奄美大島での記述が予定よりも困難であったため、これらの2地域での調査はおこなえなかった）

②記述の方法

各地域において、次のような手順で記述をおこなった。

1. 確認要求を表す形式を同定する。
2. ③の分析枠に沿って、各形式の違いを大まかに把握する。
3. ③の分析枠では違いが見出せなかった形式について、詳細な記述をおこなう。調査時の話者のコメントに基づいて仮説を構築し、それを面談調査で検証するという方法で調査をおこなった。
4. その地域の確認要求表現において、形式を使い分ける上で重要な意味的素性を抽出する。

③分析枠

確認要求表現の用法については、標準語研究の枠組み（田野村忠温, 1988, 否定疑問文小考, 国語学, 152, および、三宅知宏, 1996, 日本語の確認要求的表現の諸相, 日本語教育, 89）をもとに分析枠を設定した。次のようなものである。

- ▶ **ではないか第一類**：発見した事態を驚き等の感情を込めて表現したり、ある事柄を認識するよう相手に求めたりするもの。〈潜在的共有知識の活性化〉〈認識の同一化要求〉〈驚きの表示〉〈弱い確認の要求〉に分けられる。
- ▶ **ではないか第二類**：推定を表現する。〈命題確認の要求〉〈推測〉に分けられる。
- ▶ **ではないか第三類**：「ない」が否定辞本来の性格を発揮する。

4. 研究成果

(1) 全国の確認要求表現形式を把握

「3. 研究の方法」の(1)に対応する成果は以下の通りである。

①既存資料を用いた分析

確認要求表現の意味を担う形式のバリエーションを知るために、既存の資料を用いて分析をおこなった（松丸 2007 『確認要求表現』とその分布—否定疑問形式を中心に—）。

国立国語研究所で公開されているGAJのデータには、「行くのではないか」という「ではないか第二類」に相当するものが含まれている（ただしGAJでは「のでは」の部分だけに注目した地図化がなされている）。この資料を用いて、全国の「のではないか第二類」に相当する形式のバリエーションとその地理的分布を示したのが、図1である。図では、次のような色分けを施している。

- ▶ **赤色**：「(行く) + の + では + ないか」という要素の連鎖のうち、「では + ないか」の部分が特徴的な形式。～チャウカ（近畿）、～アラン（奄美大島・琉球）など。
- ▶ **青色**：「(行く) + の + では + ないか」という要素の連鎖のうち、「の + では」の部分が特徴的な形式。～アッテネー（秋田）、～ナデネ（山形）など。
- ▶ **黒色**：その他

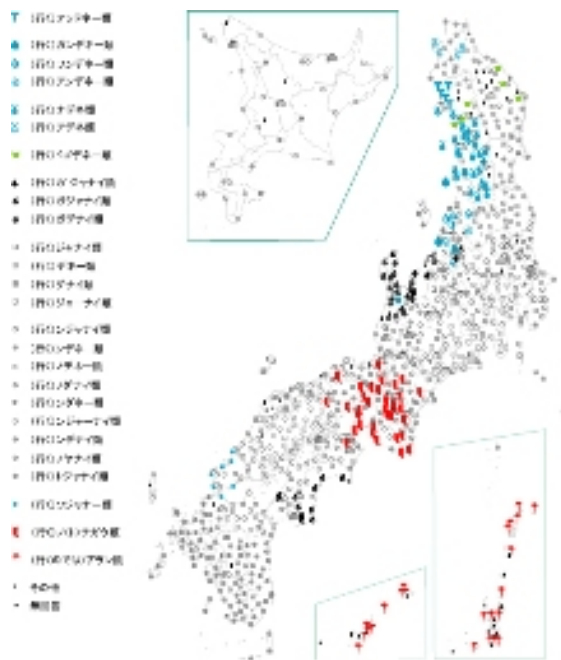


図1 「行くのではないか」の諸形式

このGAJの分析からは、「ではないか第二類」のバリエーションが把握できた。また、否定部分に～チガウ・アランのような、事態の否定を表す形式を用いるのは西日本に特徴的なことであり、逆に「のでは」の部分に～アッテ（ネー）、～ナデ（ネー）のような形式を用いるのは東日本に特徴的なことであることも分かる。

ところで、「(の)ではない」という形式は、標準語では名詞・形容動詞述語の否定形とし

でも用いられる（動詞・形容詞に接続する場合は「の」を介して接続する）。次の例を参照されたい。

- (1) 今日は静かじゃない。
 (形容動詞述語の否定形)
- (2) 今日は雨じゃない。
 (名詞述語の否定形)
- (3) 今日は雨でも降るんじゃない?
 (ではないか第二類)

このような形式的な連続性は、諸方言に共通して現れる現象なのであろうか。GAJの「静かでない」のデータと図1を比較しながら考えてみる。その際に、トチガウ類やアラン類に注目する。

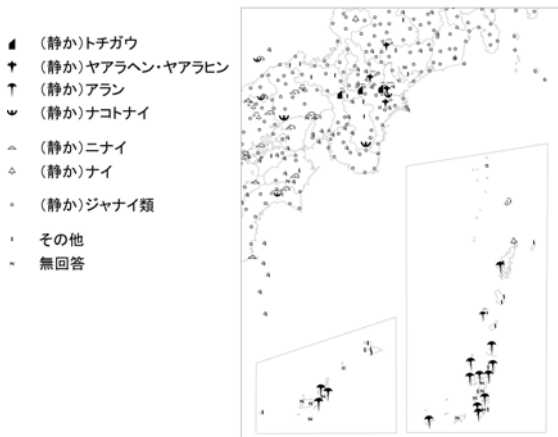


図2 「静かでない」の諸形式

図2は「静かでない」の「でない」の部分の語形の分布を示したものである。図2では、近畿地方に「トチガウ」類がほとんど見られないのに対して、アラン類は琉球地方に多く分布する。つまり、近畿地方では、形容動詞の否定形と「ではないか第二類」を別の形式で表し分けるのに対して、琉球地方ではどちらもアラン類で表すわけである。図2の分布を整理して示すと、表1のようになる。

表1 「ではないか第二類」と否定形の対応

タイプ	ではないか第二類	否定形	地域
1	トチガウ	ノヤナイ	近畿
2a	アラン	アラン	琉球
2b	ノデワナイ	デワナイ	その他

このように、「ではないか第二類」を表す形式は、否定形式との関係で考えると、大きく分けて2タイプ、細かく分けて3タイプ存在すると言えよう。琉球地域はアランという語彙的な否定形式を用いるという点では特徴的であるが、「ではないか第二類」と否定形式を別形式で表し分けるか否かという点に関しては、標準語と同じである。一方、近畿は「トチガウ」という「ではないか第二類」専用の形式を発達させており、標準語と異なる

るタイプの方言であるといえる。

この「ではないか第二類」に用いる形式と否定形との対応関係という点では、近畿・琉球地域が特徴的であることがわかる。

②大学生へのアンケート調査

多くの地点の確認要求表現形式と、その用法ごとの使い分けを探るために、大学生へのアンケート調査を実施した。調査の概要は次の通りである。

- ▶ 調査目的：若年層が用いる確認要求表現の地域差を把握する
- ▶ 調査時期：2007年11月～12月
- ▶ 調査対象：富山大学・滋賀大学・徳島大学・広島大学・山口大学・福岡女学院大学・鹿児島大学の大学生（計692名）
- ▶ 調査項目：合計19項目（方言翻訳式のアンケート調査）。本報告ではこの19項目のうち、以下の(a)～(e)の5項目の結果を報告する。

(a) 場面設定：友達と待ち合わせをしていて、太郎君が来ていないことに気づいた人がいました。そこで次のような会話をします。あなたは推測で答えているので自信がありません。

友 達：あれ、太郎は今日来るの？

あなた：さあ、たぶん来ないんじゃない

(か)？バイトがあるって言ったから。

(b) 場面設定：友達の顔色が悪いので、体調を聞いてみます。

お前、もしかして体調が悪いんじゃない(か)？

(c) 場面設定：あなたは警官だとします。巡回中に高校生に見える男の子がタバコを吸っています。あなたは、彼が高校生かどうかを確かめるために聞いてみます。

お前、もしかして高校生じゃない(か)？

(d) 場面設定：(上の場面の続き)相手は「もう二十歳を過ぎている」と答えました。あなたはその答えを聞いて独り言で次のように言います。

[独り言] そうかあ、高校生じゃないかあ。

(e) 場面設定：(上の場面の続き)ただやっぱり気になったので、もう一度だけ確認してみます。

ちょっと待って。本当に、高校生じゃないね？

考察の結果、次の点が明らかになった。

- 方言においては、「ではないか第二類」と「ではないか第三類」の意味を必ずしも1つの形式が担うわけではない。また、複数の形式で「ではないか第二類」と「ではないか第三類」を表し分ける場合、方言間で一定して同じ用法が同じ形式で表されるわけではなく、組み合わせは多様である。
- 1つの形式が表す用法の組み合わせには次のような傾向を見出すことができる。

傾向①：用法 (a) を起点にして連続した用法を同じ形式で表す傾向にある。

傾向②：同じ形式で表される用法は (a) と (b)、(a) ~ (c) など、隣り合った用法でまとめられる傾向にある。

iii. 上記の傾向から、方言では否定疑問の用王を分節する際に、次のような階層関係が成立すると考えられる。

否定疑問用法階層

第三類 ⊃ 第二類・名詞述語

⊃ 第二類・形容詞述語

⊃ 第二類・動詞述語

iv. なお、(a) ~ (e) の5つの用法を、いくつかの形式で表し分けるか、という点については、図3のような地域差が見られる。

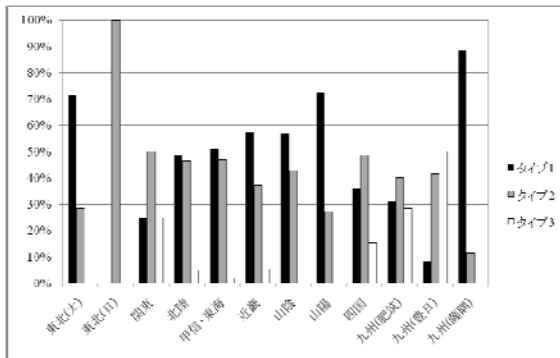


図3 形式の使い分けの地域差 (大学生)

(2) 要地方言の詳細な記述

紙幅の都合上、全ての成果を記すことができないため、ここでは奄美大島方言の確認要求表現形式について概要を記す。

当該方言では、~ガ・ガネ、~アランという形式が確認要求表現で用いられる。これらの形式が表す用法を大まかに示すと次のようになる。

~ガ = 標準語の「よ」相当

~ガネ = ではないか第一類

~アラン = ではないか第二・三類

以下、各形式の用法で標準語と異なる部分をあげる形で、その特徴を示す。まず、~ガネの特徴は次の通りである。

(a) 意志形・勧誘形には接続しない。

- ◆ よし、やってやろう {じゃないか/*ガネ}。
- ◆ 今夜は大いに飲もう {じゃないか/*ガネ}。

(b) 「みたい」「らしい (伝聞)」には接続しにくい (「かもしれない」には接続できる)。

- ◆ 雨が降るかもしれない {じゃないか/ガネ}。傘を持って行きなさい。
- ◆ お前、今度結婚するらしい {じゃない/ガネ}。
- ◆ あいつ、今度結婚するらしい {じゃない/?ガネ}。
- ◆ 天気予報によると、明日は雨が降るみたい {じゃない/*じゃガネ}。

次に、~ガは大雑把に言うとして標準語の「よ」に相当する意味を表すといえるが、「よ」よりも用法は狭い。その特徴は次の通りである。

(c) 命令形とは共起しない

- ◆ 早く行け {よ/*ガ}。
- ◆ もう行くな {よ/*ガ}。

(d) 「動詞終止形+よ」で意志・依頼を表すような文脈では用いられない。

- ◆ しょうがないなあ、俺が行く {よ/*ガ}。
- ◆ 明日、電話する {よ/*ガ}。
- ◆ お願いだよ。頼む {よ/*ガ}。

(e) 反発を表すような文脈では用いられないことがある。

- ◆ (「本当に料理を作れるの?」とからかわれ) 作れる {よ/*ガ}。黙って見てろ。
- ◆ (「君、株のことなんて分かるの?」と聞かれ) 分かる {よ/*ガ}。

(f) 発話の現場で目撃した情報をそのまま言語化した表現では用いられない。

- ◆ (ゲームに熱中していて時間を忘れていた人が) あれ、もう10時 {だよ/*じゃガ}。
- ◆ (捜し物をしていて) あっ、こんなところにあつた {よ/*ガ}。

(g) 話し手の認識を提示することによって聞き手の側に新たな知識の形成を指示する場合は用いられない。

- ◆ おーい、財布を落とした {よ/*ガ}。
- ◆ あれ、誰か来たみたい {だよ/*じゃガ}。
- ◆ (「君、行く?」と聞かれ) いや、行かない {よ/*ガ}。

最後に、~アランは次のような特徴を持つ。

(h) 存在の否定には用いられない。

- ◆ 今日は会議が {ない/*アラン}。

(i) 聞き手の意見の否定に用いられる。

- ◆ A: 明日は会議だね。
- ◆ B: {*じゃないよ/アランドウ}。

このような記述から、当該方言の確認要求表現の記述には次のような意義があると考えられる。

- ▶ 「ではないか第一類」と「ではないか第二・三類」を別形式で表し分けるという意味で、標準語とは異なる確認要求表現の体系を有する
- ▶ 当該方言の「ではないか第一類」を表す形式は、標準語で言うところの「よ」相当の形式から発達したものである。確認要求表現とその周辺の用法との関係を考えるためにも、当該方言の記述は貴重である。

(3) 成果の位置づけと今後の展望

本研究は最終的に日本語諸方言における確認要求表現の対照を目指す。本課題はその基礎的段階として、ひとまず各地方言の確認要求表現を掘り起こすことが目標であったが、この目標は十分に達成できたと考える。

今後は、本課題で蓄積した資料をもとに、日本語諸方言の確認要求表現を対照する段階に進む必要がある。その試みとして、松丸(2006)「方言における確認要求表現の対照研究に向けて」、および松丸(2008)「文末詞『ガ』の対照の試み」を公表した。今後は、基礎的資料(記述)を拡充していくと同時に、方言間の対照に重点を置いた段階に移行していきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ①松丸真大、「文末詞『ガ』の対照の試み」、『方言研究の前衛』(桂書房)、pp. 195~212、2008年、査読無
- ②松丸真大、「『確認要求表現』とその分布—否定疑問形式を中心に—」、『日本語学』、第26巻第11号、pp. 140~147、2007年、査読無
- ③松丸真大、「関西方言のヤンナとヨナ」、『阪大日本語研究』(大阪大学大学院文学研究科日本語学講座)、19号、pp. 1~15、2007年、査読無
- ④松丸真大、「見ない、見ろ」、『月刊言語』、第35巻第12号、pp. 40~43、2006年、査読無
- ⑤松丸真大、「方言における確認要求表現の対照研究に向けて」、『日本のフィールド言語学—新たな学の創造にむけた富山からの提言—』(桂書房)、pp. 273~286、2006年、査読無

[学会発表] (計1件)

- ①松丸真大、「方言における否定疑問形式とその用法」、日本語学会2008年度秋季大会、2008年11月3日、於：岩手大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松丸 真大 (MATSUMARU MICHIO)
滋賀大学・教育学部・講師
研究者番号：30379218

(2) 研究分担者 ()

研究者番号：

(3) 連携研究者 ()

研究者番号：